

とき こ

時を越えて

繭は、駅前の『タイム・イズ・マネー』というディスカウントショップでアルバイトをしていた。

繭がいつもの様に大学の講義を終えて、バイト先に入るこの時間ともなると、会社帰りのサラリーマンを初めとした駅前の人通りが急に増え始める。

いつも、怒涛の流れとなる人並みの、僅かな間隙をすり抜ける様にして、繭は仕事場へ向かう。

「おはようございます」

職員向け通口から事務所に入ると、またあの三人組が通路脇に集まって、こちらを睨みながら何かおしゃべりをしている。

これまでも繭の根も葉もない噂を流したり、何かというと繭に仕事を押し付けようとする、繭にとっては天敵みたいな三人だ。

「はあっ……」

あの三人の前で露骨にすると、また何をされるか分からない為、心の中で密かにため息を漏らす。

いつ頃から繭が三人組の陰湿なイジメの対象になったのかは、既にはっきりとは覚えていない。

つい最近の様な気もするし、この店でバイトを始めた頃には既にその様な状態だった気もする。

繭の事を酷く中傷する、あの妙な噂が流された時には、はっきり言ってやめてやろうと思ったくらいだ。

しかし、バイト上がりで、去年そのまま社員になったという、ちょっとカッコいい佐山さんが色々相談に乗ってくれたおかげで、今まで何とか続いている様なものだ。

「鴛田さんに今やめられると、困るんだよね」

そういていた佐山さんの苦笑いが思い出される。

「繭！」

ロッカールームでそんな事を考えながら、ショップのトレードマークであるロゴ付きエプロンをつけていた時、背後から友人の朋絵に呼びかけられる。

繭と朋絵は中学、高校と仲の良い友人だったが、大学進学を境に交流が途絶えがちになっていた。

そんな矢先に繭が『タイム・イズ・マネー』でアルバイトを始めた所、たまたま朋絵は既にここでバイトをしていたのだった。

「どうしたの？ 背中が凹んでるよ」

「まあね、色々いろいろと……」

昔むかしからそうだったが、朋絵ともえは普通ふつうの人とはちょっと変わった表現ひょうげんをする子だ。

『背中せなかが凹へこんでるって、どこがやねん！』と、調子ちょうしのいい時は突っ込みつこみの一つも入れるのだが、今日きょうはとてもその様なようリアクションの取れる心理状態しんりじょうたいではない。

「ああああ、これは重じゅうしゅう症しやうですねえ。もしかしたら、最近さいきん彼氏かれしとうまくいってないとか？」

「それもある……」

「それもあるって、他ほかにもあるの？」

「まあ、ね」

「そうしたらさ、今日きょうは私わたしも少し時間すこ じかんあるし、バイト明けてからでも愚痴ぐち聞いただけから気分切り替えきふん きかえよ？」

「そだね。じゃ、今日きょうは朋絵ともえ持ちもてて事ことで」

そんな感じで、繭まゆは今日きょうも人ひとが慌あわただしく行き交う仕事場い か しごとばに向かった。

アルバイトを始めた当初はじ とうしょは、レジ打ち兼雑用けんざつようみたいな事をやらされていたが、今いまでは店頭てんとうでの商品補充しょうひん ぼじゅうを担当たんとうしている。

社員の指示しじを受けて、店頭てんとうの商品しょうひんが切れない様に、随時在庫すいじざいこを補充ぼじゅうするのだが、時折ときおりお客さんきゃくさんに声をかけられると、そのまま接客対応せつきゃくおうたいをしなくてはならないので、ある程度店や商品しょうひんの知識ちしきが無くともなせない業務ぎょうむでもあった。

——あ、やっぱり佐山さんさやまさんって、ちょっとカッコいいよね。

などと密かに思いながら、繭まゆは、お客様きやくさまへ熱心ねっしんに商品説明しょうひんせつめいをしている佐山さやまの脇わきをすりぬける。

そのまま、指示しじを受けた棚たなで商品しょうひんの在庫チェックざいこを始めていると、繭まゆの背筋せすじに嫌な予感いや よかんが走る。

——あ、またいるよ。

最近さいきん、執拗しつように繭まゆを付け回つしている男おとこだ。

といっても、家まで後あとを付けられたなどという事は無い。

あくまでもこの店内てんないだけの事ことなのだが、繭まゆが気づくと常にその男おとこが視界しかいのどこかに必ずかならいて、繭まゆの方ほうをじっと見みている。

でも、それだけならば、見られる側がわとしては気分きふんが悪い事わる ことの上うへないが、とりあえず実害じつがいは無い。

それこそ繭まゆの思い過おもぎで、自意識過剰じいしきかじょうといってしまうえば、それで済すむ話はなしでもある。

しかし、繭まゆは店内てんないで一度、その男おとこにお尻しりを触さわられた事ことがあった。

その時とき、店長てんちょうに事情じじょうを説明せつめいして対応たいおうを求めたものの、『気のせいきか、なんか勘違いかんちがじゃないの？』で片付けられそうになった。

やはり店みせは客商売きやくしょうばいだから、明らかな証拠あき しょうこも無しにお客様きやくさまを痴漢ちかん扱いあつかするのはよくないというわけだ。

とはいえ、この店に勤める若い女性のアルバイトも少なくともは無かったので、当面様子を見
るとして、もしもう一度その男が痴漢行為を働いたら、その時は店としても断固たる措置
を取るという事で決着したのだった。

その時にきちんと対応しなかったからなのか、繭には、男がわざと繭を付け回している
事を認識させて、繭を嫌がらせて愉しんでいる様にさえ見える。

常に男の影を気にしながら、しかも表面上は笑顔を取り繕いながらでは、仕事にも身
が入らない為に、自然と失敗が多くなる。

その度に、店長や社員にちくりと愚痴を言われるのだ。

「繭ちゃん、最近そそっかしいね」

決して面と向かって怒ったりはしないが、何気ないその一言にも毒がある。

そんな店内にあって、社員で唯一繭を理解してくれる佐山さんとも、余り親しげにしてい
ると『佐山さんと鵜田が付き合っているみたいだ』などと、例の三人組に根も葉もない噂を
流されて、自分だけでなく佐山さんにも迷惑がかかる。

先日、たまたま休憩時間に佐山さんと話した時にも、そんな話題が挙がった。

「言いたい奴には言わせておけばいいさ。鵜田さんはそういう事気にするんだ」

と、佐山さんは全く歯牙にもかけない様子。

「何故か、最近鵜田さんが俺の事避けてるって感じてたから、何か悪い事したかなあって、
ちょっと気になってたんだ。でも、俺が原因じゃなくてよかったよ」

という事で、逆に佐山さんに余計な気を使わせていたらしい。

「それにさ、別に悪い噂じゃないし。男としては鵜田さんと付き合ってるなんて噂は、
むしろ光栄に思うけど」

こらこら、そんな事言われたら本当に好きになってしまうのではないかと……と、繭は内心焦
ってしまったものの、それ以降取り立てて特別な事件が発生した訳でもない。

いつもと変わらない毎日が続いて、続いて欲しくないあの男の執拗な店内ストーキング
にも相変わらず悩まされている。

そして今日もまた……。

商品を補充しながら、ふと物思いに耽ってしまった繭の心隙について、スナイパーは
繭の真後ろに迫っていた。

そして、繭のお尻を見知らぬ手が執拗に撫でさする。

瞬間背筋に悪寒が走って、はたと我に帰った繭は、振り返りざま目の前の男に平手打ち
を食らわせる。

「いい加減にして！」

繭の声が店内に響き、周囲の視線が繭と、繭に平手打ちを食らった男に集中する。

しかし、繭の視界の隅には、商品棚の陰に消えるあの男の姿がしっかりと捉えられて
いた。

「僕が何したっていうんだ！」
 一見ネイティブかと思うほど流暢に日本語を使いこなす外国人の男が、怒りを露にしたまま、繭の目の前に立っていた。
 「申し訳ございません」
 繭が平謝りする中、その様子を目撃した佐山さんが、とりあえず外国人のお客様を事務所に案内する。
 繭もその後について行き、店長を交えて再度お客様に謝罪する。
 痴漢と間違えられた事に、そのお客様は当初かなり立腹していたが、元々悪い人ではないと見えて、詳しく事情を説明すると何とか納得してもらった様だった。
 しかし、お客様が何とか矛を納めて帰途についた矢先に、繭は店長から即刻解雇を通告された。
 客商売のお店としては、絶対にしてはいけない過ちを犯してしまったのだ。
 幾ら繭にとって良き理解者の佐山さんでも、これはいけないといった風に、無言で渋い顔をしたままだった。
 そのまま、半ば逃げ出す様に店を出た繭は、朋絵の携帯に『ごめん、やっぱ帰る』とだけメールを入れて、そのまま家に向かった。
 繭の目に、うっすらと涙が滲んでいた。

*

「今日はずいぶん早いね」
 母の声を無視して、繭は玄関から二階の自分の部屋に直行する。
 「ご飯は？」
 更に問いかかる母に、繭は面倒臭がって『食べた』とだけ返す。
 本当は食べていない。
 とても食事が喉を通る様な気分ではなかった。
 たかがアルバイトかも知れないし、決して居心地のいい職場ではなかったのかも知れないが、繭なりに頑張っていたし、今すぐやめようとは思っていなかった。
 それなのに、あのストーカーみたいな痴漢のせいで、店を辞めさせられてしまった。
 悔しくて、涙が滲み出てくる。
 いっそ、わんわん泣いてしまえばすっきり忘れられるのかもしれないが、そこまでのストレーンな気持ちの高ぶりも無く、ただ、自分が陥れられたような結果になった事が悔しくて堪らなかった。
 繭は部屋着に着替えもせずにベッドの中に潜り込み、明かりもつけない部屋の中で、もんとやり場の無い悔しさの矛先を探していた。

ふと、思いついて携帯電話を手にする。

そして、無意識に彼氏の公太の携帯に電話をかける。

しかし、またしても留守録に切り替わってしまう。

わざわざメッセージを残すのも面倒になって、繭はそのまま回線を切った。

「なんで、こんな時に留守電なの？ それに、最近留守電ばかりだし……」

繭が、共に寄り添ってくれる人を最も必要とし、一番慰めてもらいたい時に、よりに寄って公太との連絡がつかない。

気分が落ち込んでいる時には、とにかく嫌な妄想が頭をもたげるものだ。

そうでなくても、最近の公太は少々動きが怪しい。

彼は三歳年上で、既に社会人だったから、仕事の都合上携帯電話が留守電モードになっていても不思議ではなかった。

しかし、それまでは最低限毎週末には会っていたものが、二週間に一回になったり、会う日の直前になってから急にキャンセルする事が度々あったり、とにかく最近の公太はちょっと怪しい。

なんとなく女の影がちらつくのだ。

かといって、それを直接確認する勇気も、今の繭には無い。

事実が白日の下に晒されて、それが公太と繭の破局に直結してしまったら、それはそれで耐えられないからだ。

仮に公太に問いただしたとしても、繭は浮気の確実な証拠を握っている訳ではない。

それでも変に疑って、それが繭の嫉妬深さと公太に映ってしまったら、公太に引かれて嫌われるかも知れない。

『公太が浮気しているかも……』と気になって仕方が無いのだが、仮に浮気をしていても、浮気をしていなくても、二人の間に溝を作るかも知れないのだ。

繭にとっては、どちらを選んでも、また敢えて選択を先延ばししても試練が降りかかる、究極の選択を迫られているようで、どうしていいのかわからなかった。

「もう、なんで私だけが次から次に嫌な目に遭うの！」

ふと繭が呟いた時、携帯電話の着メロがけたたましく鳴り響いた。

公太からかも……と、半ば期待して出た繭の耳には、つい数時間前に聞いた朋絵の声が飛び込んできた。

「繭、今どこにいるの？ 大丈夫？」

「今家にいる」

「そっか。一応話は聞いたけどさ、わざとお客さんを殴っちゃった訳ではないし、ある意味不可抗力なんだから、余り落ち込んじゃ駄目だよ」

「そういうけど、最近何やってもうまく行かないみたいで、なんか自己嫌悪……」

「そうやって、なんでも思いつめるのは繭の良くない所だよ。そういう時は気晴らしに…」

…そういえば、あのビジネスマンの彼氏、まだ付き合ってるんでしょ？ 彼でも呼び出して、真夜中のドライブにでも連れて行ってもらえば？」

「無理だよ。彼の携帯留守電モードだったし」

「そっか。だったら、今からこっちに出て来る？ ちょっと時間も遅いけど、気晴らしになんでも付き合っちゃおう」

「でも、明日も大学の講義あるんでしょ？」

「いいよ。少しくらいサボったって。それよりさ、繭の事佐山さんも心配してたし、自分一人で思い詰めたり、独りよがりな思い込みで取り越し苦労をしても、何にもならないよ」

「ごめん。心配してくれてるのは分かるけど、一人きりにして」

「繭……」

繭は朋絵の返事を待たずに、半ば強引に電話の回線を切った。

＊

「繭、俺達の関係、今日で終わりにしよう」

港町の海沿いに広がる有名な公園の駐車場の車の中で、公太が話を切り出した。

前々から怪しい気配は感じていたし、心のどこかで覚悟も決めていた。

しかし、いざ現実にその時を迎えてしまうと、どうしてよいのか分からず、途方に暮れてしまう。

「理由を聞かせて」

自分で喋っているのに、自分は傍らで二人の会話に耳を傾けている部外者の様に感じる、非現実的な白昼夢の様なひと時だった。

「理由は、他に好きな人が出来た。繭の事は今でも嫌いじゃないけど、二股かけるのは嫌だし、今は向こうの方が好きだから」

「そうなんだ……」

しばし間を置いて、公太が続ける。

「怒らないのか？ もっと色々言われたりとか、覚悟して来たんだけど」

「怒って欲しいの？ それに、今更怒ったって、どうにもならないし」

「そうだな」

そのまま、無言の時間が続く。

時々かもめの舞う姿も見える海沿いの公園では、公園に集まる鳩に餌をやっている幸せそうな親子連れや、海沿いで何かを話しながら寄り添っている恋人達、キャンパスに向かって港の風景をスケッチしている老人の姿が見える。

満天の日の光に照らされたそれらの人々は、みな楽しそうに微笑んでいた。

二人の乗った自動車はそのすぐそばにありながら、両者の間には越えられない深い溝

が刻まれているかの様に、余りにも好対照を成していた。

「これから、どうする？ 家まで送ろうか？」

そろそろお別れの時間だ……という公太からのシグナルだ。

恐れていた瞬間がとうとう訪れてしまった……不意に繭の心の奥からこみ上げるものがあり、繭はその場にもう一瞬でも留まらなかった。

「いい。一人で帰る」

繭が車を降り、ドアを閉める間際に一言だけ『さよなら』と残すと、そのまま一度も振り返らずに、小走りで公園の人並みに紛れた。

そのまま繭は小走りで公園の人の群れをすり抜け、なるべく周囲に人の少なそうなベンチを目で探した。

繭の心にこみ上げて来たものは、すぐにも大粒の涙となって零れ落ちそうだったし、だからといってこんなに人通りの多い場所で無様に泣き崩れる訳にも行かなかった。

だから、出来るだけ人目につかずに、思い切り泣ける場所を見つけたかったのだ。

程なく、公園の隅の木陰にあって、周囲に余り人のいないベンチを見つけると、繭は崩れる様にしてベンチに腰掛け、余り周囲に目立たない様に俯いて、声を押し殺して泣いた。

まるでコップの底が抜けた様に、あるいは真夏のスコールに地面が打たれるように、一生分の涙を泣き枯らすのではないかと思う程、泣いた。

こんな姿は、多くの人に見せたくないのは当たり前だが、それ以上に今の公太には見せられなかった。

いずれにせよ別れるしかないのに、自分だけが公太に未練を感じているように思われるのは悔しいし、公太も別れ際に女に泣かれては気まずい思いをするに違いない。

そんな別れ方は嫌だった。

『いい思い出になったよ』とお互い笑顔でお別れ……なんて出来る筈無いけど、でも、少なくとも、後腐れなく別れたかった。

別に繭から別れを切り出した訳ではなく、繭が別れたがっていたのでもないが、相手が別れたがっているのだから、仕方ないじゃない。

繭は強引に自分を説得しようとしたが、傍から相反する思いが首をもたげてくる。

もしあの時車の中で泣いていたら、もし公太の前でごねていたら、もし別れないって言うていたら、別れなくて済んだのかも知れない。

自分に否があるのではないのだし、公太だって繭の事が嫌いになった訳ではないといっていたから、別れを認めなければ何とかなったかもしれない。

『二股でもいいから別れないで！』ってお願いしたら、そのうちもう一人の女に飽きて、繭の元に戻って来るかも知れない。

でも、二股なんて嫌だし、その場しのぎで『二股でもいい』っていても、後で絶対に嫉妬する。

そうしたら、今よりももっと辛い目に遭うかも知れない。
それに、繭がそんな嫌な女だったって知ったら、公太に絶対嫌われる。

やっぱり、もう別れるしかないんだ。

繭は延々と自問自答を繰り返していた。

もう既に決着はつき、取り返しつかない事態を迎えているというのに、それをやめてしまったら、それこそ自分が修復不可能な程崩れてしまうという恐怖に苛まれていたからだ。

心の奥にほんの一本だけ残された細い柱も、余りに重過ぎる悲しみにたわみ、少しずつ亀裂が深く刻み込まれて行く……繭の心は限界点を越えようとしていた。

＊

繭は自分自身でもどうしたらいいのか分からずに、大学も休んでずっと自分の部屋に閉じこもっていた。

最初はなんだかんだと小言を漏らしていた両親も、徐々に繭がただならない状態に陥っているらしい……最近マスコミでも社会問題として取り上げられる、『ニート』や『引きこもり』になってしまったのではないかと思えば当たると、それ以降は腫れ物に触る様になってしまった。

そんな繭の携帯が、久しぶりにけたたましく鳴り響く。

最初はすぐに切れるとたかをくくって放置していた繭も、なかなか切れない着メロに根負けして電話に出る。

「繭？ 今家にいる？」

相手は朋絵だった。

「うん……」

「繭、大学もずっと行ってないんだって？ どうしたの一体？」

「色々、ね」

「色々だけじゃ、分からないでしょ。まあ詳しくはそっちで聞くから、ちょっと待っててね」

電話が切れた。

それと殆ど同じタイミングで、玄関の呼び鈴がなる。

まさか……なんと、朋絵が不意打ち的にやってきたのだ。

幾ら中学、高校時代の勝手知ったる仲とはいえ、こんなにみっともない引きこもりモグウ状態の時に不意打ちなんて、ちょっと勘弁して欲しい。

応対に出たらしい母も朋絵とは面識があるから、予想通り呆気なく家の中に入ってきた。

朋絵が階段を上がるきしみ音が、ベッドに潜り込んだままの繭の耳にも飛び込んでくる。

「繭、入るよ」

一応繭の自室の扉をノックしたが、繭の返事を待たずにどかどかと入ってくる。

「なるほどね。繭、カーテン開けるからね」

朋絵は、ベッドの中で丸まっている繭の返事も聞かずに、カーテンを全開にして窓を開け外の新鮮な空気と入れ替えた。

「どう、少しはすっきりしたでしょ」

朋絵はしばらくして窓を閉じるが、繭がベッドから這い出してくる気配は無い。

「繭、せっかくお友達が久しぶりに遊びにきたんだから、顔ぐらい見せなさい」

「嫌だ。こんな恥ずかしい顔見せられない」

「じゃあ、カーテンを半分閉じて、薄暗くしてあげるから、顔くらい見せなさい」

昔からの付き合いだから良く分かるけど、もう反抗し切れない……繭はそう観念して、首から上だけを恐る恐る布団から突き出す。

案の定、朋絵は真上から見下ろして、繭が頭をのぞかせるのを待ち構えていた。

「ほんと、泣きはらして腫れぼったい顔」

これも昔からだが、朋絵の言う事には本当に容赦が無い。

全て事実だし、本人には全然悪気が無いから、直接本人に咎め立てしても無駄なのだが、言われる側からすれば気分が悪い。

かつて似た様な、朋絵の言い方の良い悪いで大喧嘩になった事がある。

でも、結局はなぜか繭が謝って元の鞘に収まってしまった。

「だから顔出したくなかったのに！」

繭はムッとして再び頭から布団を被る。

「繭のそういう顔は、厨房の頃から散々見飽きてるんだから、今更隠すまでも無いでしょ
せっかく元々は綺麗なんだから、お手入れもきちっとして活かさないともったいないよ」
人を散々悪し様に言った後に、とってつけた様なフォローを一応入れる所も、朋絵の昔からのパターンだ。

繭自身はルックスにそれ程自信は無いけど、でも人並み程度位の認識だった。

メイク次第ではそれなりに見栄えもするし、十人の男がいたらその内の何人かの目に留まる程度の、ごく普通という感覚だ。

もちろん、人それぞれ美的感覚には差があるから、朋絵は本当にそう感じているのかも知れないが、繭には実感の籠らないお世辞にしか聞こえなかった。

「それよりも、どうしてこうなっちゃったのか、布団被ったままでもいいから話して見なさい」

繭は朋絵の問いかけに答えず、布団の中で丸まっていた。

「あんな形でアルバイトを辞める事になって、思い詰めちゃった？」

「それもある」

「この前静香に電話して聞いたんだけど、大学に行かなくなる少し前から、成績落

ち気味だったんだって？ それで、大学行くのが嫌になった？」
 静香とは、高校時代に繭や朋絵と同じ高校の同級生で、繭と同じ大学に進学した、比較的
 仲の良い子だった。

「それもある」

「あと他に何があるの？」

繭は反応しなかった。

朋絵はそれも予想の範囲内と、全く落ち着き払っていた。

「今日は繭の心の中のドロドロしたものを、全部吐き出しちゃうまで付き合うって決め
 たんだから、いつまでも待つよ」

勝手に付き合うって決められたり、いつまでも待たれても困る。

あの事をちょっとでも思い出しただけで、呆気なく泣き崩れそうなのに。

そんな風にちょっと頭に浮かんだだけでも、条件反射のように嗚咽が喉の奥からこみ
 上げてくる。

でも、ここで朋絵に話さないで、ずっと朋絵に付き添われるのも迷惑だし、第一何かと忙
 しそうな朋絵に対して申し訳なかった。

こんな最悪の私なんか、放って置いてくればいいのに。

繭はそれから一時間くらい頑張ったが、朋絵はずっとベッドの傍らから、布団に丸まっ
 た繭を見ている。

「よく頑張ったけど、今日はまだまだ長いよ。これ以上我慢したって、どんどん自分がつら
 くなるだけなんだから、早く嫌なものは吐き出してスッキリしようよ。繭の抱えてる嫌なも
 の、全部一緒に受け止めるから」

まるできっかけを待っていたかの様に、繭の喉から嗚咽が漏れ出し、目からは玉の涙が
 とめどなく滴り落ちる。

もういても立ってもいられず、繭は布団を這い出して傍らの朋絵にすがりついた。

「公太に振られちゃった……」

嗚咽交じりに繭が一言漏らすと、そのまま朋絵の胸で声を上げて泣いた。

「そっか……」

朋絵がそっと覆い隠す様に、繭の背中に腕を回し、脆くも繊細な壊れ物を扱う様に優しく
 抱きしめた。

朋絵の腕の中で、小さく小刻みに震えながら、繭は泣き崩れていた。

「繭はいつも、一人で我慢して思い詰め過ぎだよ。何でも一人で抱え込んで、自分で自分を
 痛めつけて、こんなにボロボロになって……。でもさ、人って誰でもそんなに強くないし、辛
 い時は、誰かにすがりついて泣いたって、良いんだよ」

*

繭が朋絵の腕の中でひとしきり泣いて、少しずつ気分が落ち着いてきた頃、朋絵が切り出した。

「私がなんで今日来たかわかる？」

繭は反応しなかった。

最前の様に声を上げて泣くといった様子ではなかったが、それでもまだ、静かにすすり泣いている。

「なんで今こんな事を……って、繭は思うかも知れないけど、私が勝手に独り言話すから気になったら聞いててね」

「うん……」

「素直になったね。素直な繭はとっても可愛いよ」

朋絵が、多分しばらくの間、ろくに手入れもされずに放置されていたであろう、寝癖がついて乱れまくっている繭の髪の毛を優しく撫でつける。

「繭がずっと大学を休んでるって聞いたのは静香からだって、さっきも言ったけど、その前から、あんな風にバイト辞めちゃって大丈夫かなって、気にしてはいたんだ。でも、ある時、繭がちょっと辛い目にあってるって、私の守護霊さんに教えてもらって、それで静香に電話かけてみたの。繭は何度携帯に電話しても出なかったしね。そうしたら大学もずっと休んでるって言うし、これはちょっとただ事じゃないって、今日一日時間作って来たんだ」

「守護霊さん？」

「そう。なんか、繭の守護霊さんと私の守護霊さんも仲がいいみたいで、色々お話しするみたいだけど、ある時繭の守護霊さんが私の守護霊さんに『今の繭はちょっと気持ちが悪れちゃって、このままだと危険だ』って、話してたんだって。繭の守護霊さんは一生懸命繭の事を助けようとしているんだけど、魔に魅入られちゃって聞く耳を持ってくれないって。それで、私の守護霊さんが『繭が大変みたいだよ』って教えてくれたの」

「守護霊さんって幽霊？」

「うーん、似たようなものかも知れないけど、守護霊さんは私たちの事を守ってくれたり、予め危険を知らせてくれたり、色々為になる事を教えてくれる、とても頼りになる霊だよ。友達みたいで、先生みたいな。そういう意味では、テレビの心霊特集とかでやってる幽霊とはぜんぜん違うね」

「私にも、守護霊さんがいるんだ」

「うん。直接見えたりする訳じゃないけど、私の守護霊さんがそういつてるから」

「朋絵って、いつから守護霊さんとお話出来る様になったの？ 私、今までぜんぜん知らなかった」

「うーん、もう小さい頃からだから、覚えてないけどね。子供の頃は守護霊さんって言うよりは、目に見えないけどいつも一緒にいるお友達って感覚かな。最初はみんな守護霊さんと」

お話出来るんだと思ってたけど、そうじゃないって事を知ってから、守護霊さんの事は余り喋ったらいけないんだって思って、誰にも話してないの。だから、繭は特別」

「ふうん。そっか。でも、なぜ？」

「今、話すべきだって気がするんだよね。きっと守護霊さんがそういってるんだと思う。繭も守護霊さんとお話出来た方が良くから、教えてあげなさいって事だと思う」

「私も守護霊さんとお話できるの？」

「うん。ちゃんと訓練すればね。守護霊さんの性格によっては、自分が守護している人間の行動に余り深く関わらない方がいいっていう守護霊さんもいて、その場合は幾ら訓練しても守護霊さんが取り合ってくれないかも。でも、繭の守護霊さんは私の守護霊さんに近いから、お話出来ると思う」

「そっか。守護霊さんって、私の事を守ってくれてるんでしょ？」

「そうだよ」

「でも、最近の私、どうしようもない位に最悪だし、もしかしたら私の守護霊さんって、私に似てダメダメなのかなあ」

「そんな事ないし、そんな風に思ったら繭の守護霊さんが可哀想だよ。守護霊さんが守ってるっていても、なんでもかんでも守ってくれる訳ではなくて、元々運命として経験しなくてはいけない辛い事には手を出さずに、本人にチャレンジさせるんだ。その代わり、繭が良くない方向に進もうとしている時にインスピレーションで知らせてくれたり、繭を陥れようとする悪い霊が近づかない様にしたり、繭が辛い時にも励ましたりしてくれてる筈だよ。それでも悪い方に事が進んでしまうのは、繭がその道を選択したからという事になるんだけど」

「それじゃあ、私のせいで守護霊さんにも迷惑かけてるんだ……」

「ほら、そうやって自分を責めないの。そういう風に考えちゃう部分が、魔に魅入られてるって事なんだから」

「魔に魅入られてる？」

「テレビの心霊特集とかに出て来る、人に取り憑いちゃう霊とかいるでしょ？ そういう良くない霊が繭に影響を与えているから、そうやってネガティブに考えちゃうんだよ。でも、そういう霊を呼び寄せているのも、繭自身の思いだからね」

「ええ！ じゃあ、私、悪い霊に取り憑かれてるの？」

「そうじゃないって。そりゃ、中にはそういう悪い霊もいる事はいるだろうけど、殆どの霊はそんな悪い霊じゃないし、繭の守護霊さんの様な良い霊も一杯いるんだから。でもさ、繭がネガティブ思考のままだと、そういう悪い霊の影響を受けやすくなるし、守護霊さんの力も発揮しにくくなる。だから、まず繭が、少しずつでも良いからネガティブ思考を抜けて出して、それから自分の守護霊さんを信じなきゃ。『信じる者は救われる』っていうでしょ？」

「でも……」

「でもは無しだよ、繭。それにさ、もし繭の守護霊さんだけでは手に余る様になったとしても、私だって、私の守護霊さんだってついてるんだから」

「朋絵……」

繭が再び朋絵の胸に顔を埋めて、思い切りしがみついて来た。

朋絵は繭の小さな背中に優しく腕を回し、包み込む様に抱きしめた。

「いいんだよ、甘えても。本当は甘えたくて仕方なかったのに、一人で無理して強がってたんだよね」

*

朋絵が来てから気分は多少落ち着いたものの、そんなすぐに気持ちを切り替えられる程器用な繭ではなかった。

しかし、朋絵が話してくれた守護霊さんの事が気になって、何となく守護霊さんの事を考える時間が長くなった分だけ、ほんの僅かずつでもネガティブな状態から脱却しつつあった。

また、朋絵の話聞いて以降、某テレビ局で『守護霊さんの伝言』という深夜番組を見つけて、なんとなくその番組も見られる様になった。

悩みを抱えた相談者が、守護霊さんと話が出来るという心霊カウンセラーを通じて、相談者の守護霊さんとコンタクトを取って、悩みを解決する方法を模索するという番組だ。

相談者は芸能人が多かったが、時々一般人も参加していた。

悩みはそれぞれよくある恋愛や夫婦関係から、果ては命に関わる深刻なものまで様々だが、深刻な悩みはたまにしか取り上げていなかった。

それにしても、その番組を通して感じたのは『前世の因縁』の影響力の大きさだ。

自分の恋人や妻、夫とは、大抵が前世でも妻や夫、もしくは家族だったり、自分と近い関係を繰り返しているという事だった。

今、自分と仲のいい人は前世でも仲が良かったり、仲の悪い人は前世で敵だったりする事もあるらしい。

確認のしようが無い以上、その事を信じるとも信じないとも言えないのだが、もしそんな事があったら面白いな……とは思った。

そして、自分の前世に対しても急速に興味を沸いて来る繭だった。

そんな矢先に、普段は滅多に顔を見せる事の無い、社会人として单身生活を送っている兄貴が、久しぶりに家に戻ってきた。

兄貴は繭が引きこもっている事を、両親から聞いて知っていた様だが、これまで特に音沙汰が無かった。

それがなぜ今になって急に戻ってきたのだろうか？

もちろん自分の実家なのだから、戻ってくる事自体は不思議でも何でもない。
でも、兄貴が帰ってくるのは、一人暮らしをする様になって以来初めてだった。

「繭。入るぞ」

兄貴はドカドカと人の部屋に立ち入って、勝手に部屋の明かりをつける。

「お前、こんな暗い所で何やってんだ？」

他人大きな箱を持ち込むと、図々しく部屋の真ん中に腰を降ろして、勝手に箱の中身を広げ始めた。

「他人の部屋で勝手に何やってんの？」

我慢の限界を超えて、繭が兄貴を咎めようと布団から飛び起きると、繭の目にも箱の印刷が飛び込んできた。

「ねえ、これ、どうしたの？」

某有名メーカー製のノートパソコンだった。

「これか？ おかんが電話で『繭が引きこもって云々……』って泣くもんだから、繭の社会復帰繭リハビリ専用マシンだ。俺のボーナス半分飛んだんだから、大事に使いよ」

「本当？ ありがとう」

「それからさ、おとんにいって、家にもADSL回線引いてもらったから、この部屋からでも無線LANで快適なインターネットライフがスタートってな。今から設定も全部してやるから、ちょっと待ってな」

パソコン自体は電源を入れるとすぐに使える状態になっていたのも、後はインターネットにつなげる設定をするだけらしい。

自分自身もパソコンを活用していて、それなりに知識のあった兄貴は、手際よくパソコンの設定を変更していく。

繭自身は以前から何となく興味はあったものの、難しそうなのでこれまで敬遠していたのだった。

かつて学校でもパソコンの授業を受けた事はあるが、代表的なソフトの使い方ならまだしも、パソコン自体の設定となると訳がわからなかった。

「ちゃんとプロバイダー登録も済ませてあるから、ネットにもすぐ繋がるし、メールもすぐ使えるからな」

繭が肩越しに覗き込む中、兄貴は淡々と手順書通りに各種設定を変更してゆく。

そして、インターネットを見るソフトをクリックすると、いきなりパソコンのメーカーのホームページの画面が出てきた。

更に、兄貴が何かを入力すると、今度は有名な検索サイトのホームページが出て来る。

「ここ知ってるよ。学校の授業で見た」

「まあ、有名なサイトだからな。とりあえずネット接続はOKだ。あと、メールはっと……」
一旦インターネットの画面を消して、今度はメールのソフトをクリックする。

「とりあえず最初に発行された仮アドレスで登録しとくからさ、変えたかったら手順書を見て変えればいい」

「えー。私 こういうの苦手だって判ってるくせに……」

「ったく、だったら、暇な時にでも変更しに来てやるからさ。その代わり、今日明日すぐに来いって言っても無理だからな」

「はーい」

「一応俺のメルアドもアドレス 帳 に登録しとくから、何かあったらメール入れるといい」

「何、その名前の 所 の兄者って？」

「いいじゃん。わかりやすくて」

その様にしてメールのテストも終わり、とりあえず一通りの準備は 整 った。

「IEの使い方は分かってるんだろ？」

「IEって？」

「だからあ、インターネットを見るソフト」

「うん。学校で使ったからね」

「だったら、ちょっと使ってみ。見ててやるから」

「うん」

繭はマウスの 扱いが余り得意ではなかった。

何とかポインターをIEのアイコンに合わせるが、IEを起動するとパソコンメーカーのホームページが表示される。

「ねえ、これちゃんと表示されないよ。あの検索する 所 」

「当たり前じゃん。これがデフォルト設定なんだから、ちょっと貸してみ」

兄貴にボタンタッチすると、難しそうな設定画面を出して、そこに何かを打ち込んでいく。

設定画面を閉じて、家のマークのボタンを押すと検索サイトのページが出てきた。

「出た出た！」

「一旦消して、もう一度起動してみ」

「うん」

兄貴の指示に従って画面を一度消し、もう一度IEを起動すると、今度は目的の検索サイトが表示されていた。

「あと、お気に入りの登録は？」

「うん、わかる」

繭はマウスポインターでお気に入りのアイコンを指し示す。

「じゃ、後は使いながら覚えるんだな。いずれにしても、このままの状態は良くないからさ、とりあえずネット経由だけでも、外とコンタクト取って、人とのコミュニケーションのリハビリでもするんだな。それから、『Wちゃんねる』って知ってるだろ？」

「あの、ニュースとかで犯罪者が書き込みしたって言ってる所でしょ？」

「それ、俺も時々見に行くし、色々な掲示板があって結構面白いんだけど、聞いた話ではあそこに入り浸っているネット廃人もいるらしいから、行くんだったら程々にしろよ。あとネトゲも廃人になるから止めとけ」

「うん」

「じゃ、俺帰るから」

「もう帰っちゃうの？」

「明日仕事だし、今日はパソコンの設置に来てやっただけだし」

「うん。わかった……」

「また様子見に来るからさ。今はちゃんと話してるんだから、おとんやおかんともちゃんと話してやれよ。心配してるんだし」

「だってえ……」

「そのノーパソは繭の社会復帰支援リハビリ専用マシンなんだから、今度来た時に繭がネット廃人になってたら没収だからな」

「ええー」

「だからさ、とりあえず今興味がある事とか、色々検索すれば良いじゃん。そのうちに、そういう興味のある事に関連して、外に出たり人と会いたくもなるって」

*

繭は早速マイパソコン、『にゃんこ一号』に向かった。

最近気になっている事と言えば、もちろんアレだった。

“守護霊さん”

検索ボタンを押すと、なんと五十万件以上見つかった。

「へえー。こんなにあったら、全部見るのに時間掛かっちゃうね」

それからもう一つのキーワードも入れてみる。

“前世”

検索ボタンを押すと、こちらはなんと一千万件を越えていた。

「こんなの全部見てたら、何日掛かるかわからないよ」

繭はとりあえず“守護霊さん”で検索しなおし、一番最初のページから順番に読み始めた。しかし、すぐに余り関係のなさそうなページがかなり検索に引っかかっている事を知った。

ブログや商用サイトがかなり目立つ。

更には、守護霊とか守護霊さんといったキーワードが入っていれば全て引っかかってしまうから、単なる雑談の様な記事がかなり含まれている。

「守護霊さんとお話する方法が知りたいだけに……」

それこそ百件も見ていると、次第に眼も疲れてくるし、何よりも飽きてくるし眠なくなってくる。

「あーあ、インターネットって、何かめんどくさいね」

幾ら興味があるとは言え、慣れないパソコンの操作を延々と繰り返すのでは、未だ心理的に不安定な繭にとってはなかなか集中力の続かない作業であった。

しかし、『瞑想をすれば良いらしい』という事だけは、なんとなく理解出来た。

今度は“瞑想”が具体的にどうするものか良く分からなかったが、大まかに『リラックスして静かにしていれば良いらしい』というイメージはあったので、とりあえず挑戦してみることにした。

それでダメならば、明日インターネットでもう少し調べてみればいい……どうせ“瞑想”はどうするのか良く分からないのだから。

リラックスと言えばお風呂……という事で、繭はバスタオルと替えの部屋着と下着を持って風呂場へ向かう。

階段を下りて風呂場に繋がる廊下を歩いていると、相変わらず居間で毎週 定番のテレビ番組を眺めている父が声をかけてきた。

「繭、風呂入るのか？」

「うん」

そのまま通り過ぎようとしたが、兄貴の『没収！』の言葉を思い出して、もう一度父の方に向き直る。

「お父さん、インターネット、ありがとう」

父は何も言わなかったが、なんとなく笑っている様な気がした。

最初はちょっと緊張したけど、父の顔を見たら『言ってよかった』と思いつつ、繭は久々の浴槽に浸った。

といっても、別にこれまでお風呂に入らなかった訳ではない。

元々綺麗好きでお風呂大好きだった繭が、公太に振られたあの日以来、シャワーでざっと全身を洗い流す程度で済ませていたのだ。

気分的には、とてもお風呂にゆっくり浸っていられる余裕はなかったが、せめてシャワーくらい浴びないと、生理的に気持ちが悪いくらいだった。

それから、頭からシャワーを浴びると、涙を流しても誤魔化せるという理由もあった。

一人むせび泣きながらシャワーを浴びた夜が、一体何度あった事だろう。

その様な訳で、繭は久しぶりに肩から湯船に浸かっていた。

先程脱衣場の鏡で、泣き腫らして無様にむくんだ自分の顔を正視出来る様になったのも、ちょっとした心境の変化と言えるのかも知れなかった。

湯船に浸かりながら、以前習慣的に行っていたフェイシャルマッサージにも取り組ん

でみる。

所詮は気のせいかもしれないが、自分自身では手間をかけた分くらいの効果はあると思
っていた。

ほんの数十分の事ではあるが、繭は肉体的にも心理的にも皮を一枚破って脱皮した様な
心地よくも清々しい気持ちに包まれていた。

「こんなに気持ちが良いなら、もう少し早く湯船に浸かっていればよかった」

以前ならば、この様な些細な事で『なぜ気が付かなかっただろう?』と思い悩んで落
ち込む所だが、今は『それでも今気づいてよかった』と素直に感じられる自分がいた。

こうして、すっかりリラックス気分を取り戻していた繭は、いよいよ本番である“瞑想”ら
しきものに取り掛かるべく、喜び勇んで湯船を後にした。

居間では、相変わらず父が飽きもせず定番のテレビ番組を眺めながらお茶を啜っており、
向かい合うようにして母もお茶を啜りながら同じテレビ番組を見ていた。

繭はまた兄貴の『没収!』を思い出し、居間の両親に『おやすみ』と試みてみた。

母は呆気にとられている様だったが、父は笑っている様で、背中越しに『おやすみ』と返事
を返してくれた。

繭は、なんか少し得した様な気分でも階段を駆け上がり、いよいよ“瞑想”らしきものに
挑戦してみる。

瞑想と言うと頭に浮かぶ、インドのお坊さんの座っている姿を真似して、足を組んで
背筋を伸ばしてみる。

しかし、なんとなく足にばかり意識が向いて、ぜんぜんリラックスできない。

そのまますぐに挫折して、真っ暗な部屋の真ん中で横になって、ぼんやりと守護霊さんの
事を考えていた。

どんな人(つか霊だけど)かとか、あんなにボロボロの自分を守ろうと頑張ってくれた
のかな……とか、どうやったら守護霊さんとお話出来るんだろう……と言った事を、朋絵
に聞いた話を思い出しながら、漠然と心に描いていた。

一体守護霊さんとお話出来たら、私は何をお話したいんだろうか?

まず、自分がダメダメ過ぎて、迷惑ばかりかけてごめんね……って言う。

それから、今まで気付いて上げられなくて、ごめんね……っていう。

その次に、いつも守ってくれてありがとう……っていう。

それから、いつも励ましてくれてありがとう……っていう。

あとは、もっと色々話したいけど、でも、これだけは絶対に言いたい。

そんな事を漠然と考えているうちに、何だか目が潤々してきて、勝手に一筋の涙が零れ
た。

別に泣きたかった訳でもないし、守護霊さんの事を考えていると悲しくは無かったのに
何故か涙が流れた。

よく分からないけど、なんとなく守護霊さんと心がつながった様な気がした。
 繭は部屋着の袖で涙を拭い、今度はベッドの上で横になりながら思った。
 もしかしたら、“瞑想”なんて難しい事をしなくても、守護霊さんの事をずっと考えてい
 れば、そして守護霊さんの事をずっと信じていれば、いつか守護霊さんは話し掛けてくれる
 かも知れない。
 決して気負わない程度に、守護霊さんの事を思っていれば、きっと気持ちは通じるんだ。
 明日インターネットでもう一度調べてみるけど、今日は守護霊さんの事をもっと色々考
 えてみよう。

*

なんとなく守護霊さんの事を考えているうちに、繭はいつの間にか眠ってしまっていた
 いや、多分眠っていたんだと思う。
 夢を見ていたから。
 何か、とても不思議な夢だった。
 「繭はどうしたいの？」
 そう問いかけられていた。
 誰に？
 分からない。
 でも、全然怖くは無かった。
 途轍もなく大きくて、深くて、なんでも知っていて、そして繭のすぐ傍にいる、何か。
 「繭はどうしたいの？」
 どうしたいんだろう。
 もう一度、バイト先に戻りたい？
 あの三人組に復讐したい？
 佐山さんともう少し仲良くしたい？
 あの嫌らしい痴漢ストーカーを警察に突き出したい？
 間違えて叩いた人にもう一度謝りたい？
 店長の解雇通告を取り消しさせたい？
 公太とよりを戻したい？
 また大学へ行きたい？
 朋絵に甘えて泣きたい？
 それとも朋絵に謝りたい？
 両親とちゃんと向き合いたい？
 兄貴と話したい？

守護霊さんと会いたい？

自分の前世を知りたい？

一体、私は何をしたいんだろう？

「繭はどうしたいの？」

わからない。

どうしたいかなんて、考えた事も無い。

いや、どうしたいかなんて、いつでも考えていた。

でも、他人の目を気にして、他人の反応を気にして、怒られたくなくて、嫌われたくなくて、いい子でいたくて、自分のしたい事なんて、あんまり出来なかった。

繭がこうしたいっていても、いつともダメだって言われてた。

こわくて、こわくて、人の言う事はばかり、聞いてた。

繭はどうしたいんだろう？

私はどうしたいんだろう？

——やっぱり、繭は、繭でいたい。

繭は、ありのままの、繭でいたい。

すぐ落ち込むし、すぐ悩むし、人に流されやすいし、言いたい事も言えないし、嫉妬するし、すぐ泣くし、脆いし、立ち直れないし、甘えんぼだし、すぐむくれるし、すぐ諦めるし、ほんとダメダメでどうしようもない私だけど、朋絵は私にも素敵な守護霊さんが付いてるって言ってた。

繭が全部ダメダメでどうしようもないなんて、守ってくれる守護霊さんに申し訳ない。

繭にだって、少しくらい、いいところがある筈。

それがどこかなんて分からないけど、まだ見つかっていないだけ、そう信じたい。

一つくらい繭のいいところがないと、繭も、守護霊さんも可哀想。

「私は本当の私になりたい！」

繭は思わず叫んでた。

「本当の繭になるには、どうしたらいい？」

と問いかけは更に続く。

「えっ？」

どうしたらいいんだろう。

「本当の繭になるには、どうしたらいい？」

わからない。

本当の繭ではないというのは、単なる思い付きというか、直感の様なものでしかない。

でも、繭は自分のダメダメな所しか知らない。

繭のいい所があるのかどうかは分からない。

つまり、繭は自分の半分しか知らない事になる。

もっと自分を知る……それが繭の導き出した答えだった。
 「本当の私になるには、私の知らない部分を知ればいいのか？ 最悪じゃない、多少はマシな私を探せばいいの？」
 繭には自信が無かった。
 自分自身の事なのにわからない。
 自分自身の事なのに自信がもてない。
 ダメな私ならこんなにたくさん見つかるのに。
 「自分を知るにはどうすればいい？」
 更に問いかけは続く。
 自分自身に分からないのだから、誰かに聞けば良いかしら？
 父や母や兄貴に？
 学校の先生や友達に？
 彼氏に？
 バイトの同僚に？
 その他、私を知っている全ての人に？
 いや、違う。
 私はこれまで、全ての人に対して、そして自分に対しても自分を偽ってきた。
 嘘の自分を演じてきた。
 本当の私なんて、誰も知らない。
 みんなが見ている私は、全部私が嘘と偽りで作り上げた虚像でしかない。
 そして、わたしは、みんなだけでなく、自分自身をも騙した嘘つき。
 生まれてからずっと、自分も含めた世界中の人々を騙し続けてきた、史上最悪のペテン師
 なぜ、どうして、私の悪い所、酷い所はこんなにたくさん見つかるのに、私の良い所
 は悲しい位に見当たらないの？
 守護霊さん教えてください。
 私はそんなに悪い子なのですか？
 謎の声からの返事は無い。
 「やっぱり……」
 繭が自分の心の中で作り上げた、思いつく限りの悪しき部品を不恰好に積み上げただけの醜悪な『本当の繭』像に半ば納得し、自分の醜さを受け入れてしまったと言う余りに悲しい現実、思わず一筋の涙が頬を伝った瞬間、どこからか声があった。
 「繭、あなたはまた同じ過ちを繰り返すのですか？」
 その声に、繭の頬を伝う涙が凍った。
 「繭が自分の半面しか見極められないのは、片方の瞳でしか物事を見ていないからです。勇気を出して、両方の目を見開いて、あなた自身の真実の姿を見極めて下さい」

「それは一体、どういう事ですか？」

それっきり、あの声からの返答は無かった。

しかし、その声は一見厳しく突き放す様な鋭い感触を覚えた反面、自らが千尋の谷に突き落とした我が子が、力強く崖から這い上がる様を慈愛のこもった瞳で見つめる獅子のような、仄かな温かみと優しさをも兼ね備えている様な気がした。

たった一言ではあったが、自らが仕掛けた暗黒の底なし沼に嵌って、今まさに頭から飲み込まれそうになった瞬間に、神々しく光り輝く天からの救いの手が舞い降りた……繭にはそう感じられた。

救われた……と。

＊

気が付くと、繭の頬は涙の流れた跡が乾いてガビガビになっていた。

最後の一言がなければ、繭は再び泥の海にもがき苦しむ日々逆戻りするところだった。

でも、少しの良い所もなく醜いばかりの『本当の繭』像が誤りであると、あの声ははっきりと告げたのだ。

たったそれだけで、繭の気持ちを再び後戻りさせないだけの効果があった。

所詮はただの夢だ。

気紛れな夢物語を一々真に受けるのは、他の人から見れば愚かしい事かも知れない。

でも、例え根拠の無い夢でも、そこに微かな希望が見出されるのなら信じてみたい。

自分自身を納得させる理由なんて、今はなんでも良かった。

繭は、とりあえず違和感のある涙の残骸を洗い流したくて、洗面所で冷たい水を頬に叩きつけた。

冷たい水は自然と間延びした肌を引き締め、背筋をシャキッと伸ばしてくれる。

居間から筒抜けになっているダイニングテーブルでは、父と母が朝食を取っている。

今や、繭が両親を目の前にしての定番となった、兄貴の『没収！』の声に背中を押されて、ダイニングテーブルの自分の席に座る。

前回両親と朝食の席を共にしたのは、いつの事だろう。

「繭も朝ごはん食べる？」

「お味噌汁が飲みたい」

昨日とは違って、母もいつも通りに戻っている様だ。

内心どう思っているのかは分からないが、少なくとも外見は、以前から良く知っている母と同じ様に見える。

父は無言のまま、もうそろそろご飯を食べ終えようとしていた。

繭はもう一度『没収!』の声の力を借りて、無言の父に切り出した。
 「迷惑をかけて、ごめんなさい。でも、もう少し時間を下さい」
 「繭ももう大学生だ。自分の事は自分で考えて決めなさい」
 父はそういい残すと、慌しく出勤した。
 繭がこれまでに思い描いていたイメージと違って、話の分かる父だった。
 もう飽きる程繰り返し飲んだ母の味であるお味噌汁も、何だかとても懐かしく感じた。
 この一口だけで、何も言葉を交わさなくても、関係がギクシャクしていたこれまでの時間を埋め合わせて、昔の様に成れた気がする。
 「美味しかった。ごちそうさま」
 母のぬくもりのこもった一杯の味噌汁が、これまで寒さに凍えていた繭の心に染み渡って、また少し柔らかく解きほぐしてくれた様な気がして、温かい気持ちのまま自室に引き上げてきた。
 私は一体どうしたんだろう。
 今まででは小言ばかり言う父や母が煩わしくて、自分から避けてばかりいた。
 昔はそんなこと無かったのに、いつの間にか避けていた。
 でも、今の父も母も、こんな最悪な繭なのに、小言一つ言わずに見守ってくれている。その事に、今、気付いた。
 普段は滅多に会わない兄貴だって、繭の事を心配して『にゃんこ一号』を買ってくれた。朋絵には一杯助けてもらった。
 そして、私の守護霊さんは……いつも一緒にいて、私の事を優しく包み込んでくれている。
 ただ、今まではそれを感じられなかっただけだ。
 今は、守護霊さんが繭にぴったり寄り添っていてくれる。
 何となくそんな気がした。
 守護霊さんが守ってくれているという意味が、何となくわかった気がする。
 どうしてもそれを確かめたくて、繭は朋絵の携帯にメールを送った。
 朋絵が来た後、テレビの『守護霊さんの伝言』を見る様になった事、兄貴がくれたパソコンで守護霊さんや前世について調べている事、“瞑想”らしきものをやったら不思議な夢を見た事、ふと色々な人に守られてると気付いた事、今守護霊さんが一緒にいてくれる様な気がする事を、かいつまんでメールにして送った。
 それから『にゃんこ一号』のスイッチを入れて、インターネットで“瞑想”について調べてみる。
 早速瞑想法を簡単に解説したホームページが幾つか見つかった。
 簡単に言うと、目を閉じて一つの事に意識を集中する事らしい。
 その、意識を集中しやすくする為に、呼吸法やイメージトレーニングと言った技術を使

う。

そういえば、最近^{さいきん}はスポーツの選手^{せんしゅ}が、イメージトレーニング^{せいせいこうじょう}を成績^{せいき}向上^{こうじょう}に役立^{やくだ}ててい
るという話^{はなし}も聞^きく。

「ふうん。呼吸法^{こきゅうほう}とかは知らなかつたけど、守護霊^{しゅごれい}さんの事^{こと}を考^{かんが}えらって方向性^{ほうこうせい}は合^あって
るみたい」

幾つか瞑想法^{こきゅうほう}のページ^{ページ}を読み耽^よっているうちに、朋絵^{ともえ}からメール^{メール}の返事^{へんじ}が戻^{もど}ってきた。

——繭^{まゆ}、あれから色々な事^{いろいろこと}があつたみたいだね。ちょっと安心^{あんしん}した。繭^{まゆ}の見た夢^{みゆめ}は、きっと
守護霊^{しゅごれい}さんとの対話^{たいわ}だと思います。繭^{まゆ}が守護霊^{しゅごれい}さんの事^{こと}を強^{つよ}く思^{おも}ったから、気持ち^{きもち}が通^{つう}じた
のではないかな。私^{わたし}は繭^{まゆ}の良^よい所^{ところ}をたくさん知^しっているよ。でも、守護霊^{しゅごれい}さんは繭^{まゆ}に『自分^{じぶん}
で見つけなさい』って言^いっているのだから、今は言^いわないで置^おくね。それから、前世^{ぜんせい}の事^{こと}が知^し
りたかったら、守護霊^{しゅごれい}さんにお願^{ねが}いしてみたらどうか？ もし守護霊^{しゅごれい}さんが『繭^{まゆ}に教^{おし}えた
方^{ほう}が今後の繭^{まゆ}の為^{ため}になる』と判断^{はんだん}したら、きっと教^{おし}えてくれると思う。

やっぱり朋絵^{ともえ}は頼^{たよ}りになる。

そっか、『守護霊^{しゅごれい}さんの伝言^{でんごん}』でやっていたのに、なぜ守護霊^{しゅごれい}さんに私^{わたし}の前世^{ぜんせい}を聞^きこうっ
て思^{おも}いつかなかつたんだろう。

それにしても、朋絵^{ともえ}ったら『繭^{まゆ}の良^よい所^{ところ}をたくさん知^しっているよ』なんて、ちょっと言^い
過ぎだよ……と、これまでなら思^{おも}ったかも知^しれないけど、今は単^{ただ}に自分^{じぶん}が見^みていなかっただ
けかも知^しれない、本当^{ほんとう}は朋絵^{ともえ}の言^いう方^{ほう}が正^{ただ}しいのかも知^しれないって思^{おも}える。

そう思^{おも}えるのも、みんなあの不思議^{ふしぎ}な夢^{ゆめ}のおかげ。

朋絵^{ともえ}の言^{こと}葉^ばを信用^{しんよう}するなら、守護霊^{しゅごれい}さんのおかげ。

早くも、今夜^{こんや}の繭^{まゆ}の瞑想^{めいそう}のテーマ^{テーマ}が決定^{けつてい}していた。

「今夜^{こんや}は、守護霊^{しゅごれい}さんに私^{わたし}の前世^{ぜんせい}について聞^きいてみよう」

一体^{いったい}、自分^{じぶん}の前世^{ぜんせい}はどんな人生^{じんせい}を送^{おく}ったんだろう。

幸^{しあわ}せな前世^{ぜんせい}だつたんだろうか、それとも不幸^{ふしあわ}せな前世^{ぜんせい}だつたんだろうか。

前世^{ぜんせい}の自分^{じぶん}は、一体^{いったい}何^{なに}を見^みて、何^{なに}を思^{おも}い、どんな経^{けい}験^{けん}を積^つんだのだろうか。

そして、前世^{ぜんせい}の経^{けい}験^{けん}は、今の繭^{まゆ}にどの様^{よう}な影^{えい}響^{きやう}を及^{およ}ぼしているのだろうか。

＊

ここは一体^{いったい}どこだろう？

木^きの家^{いえ}や茅^か葺^{やぶ}きの家^{いえ}が疎^{まば}らに連^{つら}なる、山^{やま}の麓^{ふもと}と言^いった雰^{ふん}囲^い気^きの村^{むら}。

街^{かい}道^{どう}沿^そいには馬^ば車^{しゃ}が止^とめられている。

馬^{うま}の鼻^{はな}面^{づら}を親^{した}しげに撫^なでている私^{わたし}……動^{どう}物^{ぶつ}の事^{こと}がとつても好^すきみたい。

あっ！ 馬^{うま}が突^{とつ}然^{ぜん}暴^{あば}れて、私^{わたし}は突^{とつ}き飛^とばされて……。

馬^ば車^{しゃ}はそのまま何^{なん}人^{にん}も人^{ひと}を突^{とつ}き飛^とばしつづ暴^{ほう}走^{そう}していった。

なんにん ひと いた うめ ち まみ
 何人もの人が、痛みに呻き、血に塗れていく。
 そして、一人、また一人と死んでゆく。
 お前のせいだ！ お前が悪い！ 全てお前が！
 わたし わる わたし なに
 私は悪くない！ 私は何もしていないのに！
 むらびとせんいん わたし せ お いしつぶて な
 村人全員が、私を責め、追いたて、石礫を投げる。
 わたし
 私のせいじゃないのに！
 わたし むら お よう ひとざとはな がけ わき こ や ひとりぐ あに
 私は村を追われる様にして、人里離れた、崖のすぐ際の小屋で、一人暮らしをしている兄
 の元に身を寄せた。
 あに むかししんゆう うらぎ ひと きら よう ひとり
 兄は、昔親友に裏切られてから人を嫌う様になり、それからずっとここに一人でいた。
 でも、村の人はすぐに兄の小屋にまで押し寄せてきた。
 ひとつろ いもろと た ひとつろ ひとつろ
 「人殺しの妹を出せ！」「人殺し！」「人殺し！」
 わたし かば あに むらびと ようしゃ なく け
 私を庇う兄を、村人は容赦なく、殴る、蹴る。
 ふたり がけ うえ お
 二人は崖の上に追い詰められていた。
 しつよう せ た むらびと
 なおも執拗に責め立てる村人。
 あし すべ がけ お わたし て あに ひっし つか
 あっ！足を滑らして、崖から落ちそうになる私の手を、兄が必死に掴んでいる。
 て はな て はな て はな
 「手を離せ！」「手を離せ！」「手を離せ！」
 わたし て ひっし つか あに むらびと ようしゃ なく け
 私の手を必死で掴む兄を、村人は容赦なく、殴る、蹴る。
 あに て はな わたし がけ した
 そして、とうとう兄の手が離れ、私は崖の下へ……。
 つぎ き つ とき わたし ねどこ よこ
 その次に気が付いた時、私は寢床に横たわっていた。
 わか しんせつ いしゃ せんせい たす
 若い、親切な医者の方が助けてくれたのだった。
 がけ おと あと がけ した なが かわ つた かりゅう なが
 崖から落ちた後、崖の下を流れる川を伝って、かなり下流に流されたいらしい。
 せんせい わたし けんしん かんびよう
 先生は私を献身的に看病してくれた。
 わたし せんせい こと す
 いつしか、私は先生の事が好きになっていた。
 せんせい わたし こと あい
 先生も私の事を愛してくれた。
 わたし せんせい ちと とど じょしゆ せんせい てつた こと
 私はそのまま先生の元に留まり、助手として先生のお手伝いをする事にした。
 せんせい うて よ いしゃ かね な ひと ちりよう よう
 先生は腕の良い医者だったが、お金の無い人にはただで治療してあげる様な、とても
 りょうしんてき いしゃ
 良心的な医者だった。
 けっ せいかつ らく
 それだけに、決して生活は楽ではなかった。
 わたし せんせい こと す そんけい せんせい ふたり ひ び たの
 でも、私は先生の事が好きだし、尊敬もしていたから、先生と二人の日々はとても楽しく
 まいにち じゅうじつ
 毎日が充実していた。
 すこ せんせい やく た おも
 少しでも先生の役に立ちたいと思った。
 わたし かんじゅ せ わ ひと いえ たびたびかよ
 私は、ある患者さんのお世話の為に、その人の家に度々通っていた。
 せんせい りねん きょうかん けんしんてきかんこ め さ せんせい わたし うたが め み
 先生の理念に共感した献身的看護を目指しただけなのに、先生は私を疑いの目で見た
 うわき みつう
 「あいつと浮気しているんじゃないか」「あいつと密通しているんじゃないか」
 わたし せんせい こと す せんせい やく た かんじゃ せ わ
 私は先生の事が好きで、先生のお役に立ちたいと、患者さんのお世話をしただけなのに、

なぜ？

そんな矢先に、私は妊娠している事を知った。

先生は嫉妬に狂って、私を責め立てた。

「裏切り者！」「あんな奴の子は、流産させてやる！」

先生は、私のお腹を、殴る、蹴る。

「先生！ 違うの！ この子は」

お腹の中の子は、先生の子だった。

だって、あの患者さんの所へは、看護の為に行っていただけなのだから。

こんなにも好きで、こんなにも尊敬している先生に信じてもらえないなんて、私はどう

したらいいの。

先生は人の命を救うお医者さんなのに、せっかく授かった愛するあなたと私の子を、あなた自身が殺めてしまうなんて。

「やめて！ 先生！ やめて！」

そのまま視界がフラッシュバックする。

——^{まゆ}。——

「あの、これは？」

——あなたの、ある、前世の記憶です。

「前世の記憶？」

——あなたの見たがっていた、前世の記憶です。あなたの前世の記憶に、あなたの真実の姿は見つかりましたか？

「わかりません。でも、確かに私の不注意もあったと思いますが、それでも、前世の私の受けた仕打ちは酷いと思いました。ただ、兄は私を守ろうと懸命になってくれましたし、先生は本当に私を愛してくれました。私も先生の事がとても好きで、その時は幸せでした。最後は悲しい結末でしたけど」

——^{まゆ}。あなたは更なる前世の記憶を求めるのですか？

「はい。お願いします」

——では、もう一つの前世の記憶の封印を解きましょう。

そして再び視界がフラッシュバックする。

ここは、中世のヨーロッパだろうか。

石畳の道に、レンガの家が建ち並ぶ町に、私はいた。

私は、恋に落ちていた。

彼は、町の靴屋で働く靴職人だった。

二人はお互いに心を通わせ、順調に愛を育んでいった。

そして、遂に結婚を決意し、私と彼は、私の父に二人の結婚を認めてもらう様にお願いした。

しかし、父は私たちの結婚を認めなかった。

父は手広く事業を営む、そこそこの資産家だった。

その時代の社会的背景もあったが、そのために格とか家柄とかに拘る面があって、それなりの家柄の者でなければ私を嫁には出せないという考えの持ち主だった。

ましてや、町の靴職人に嫁ぐなど、自分から苦勞を背負い込む様なものだと、殆ど門前払いの扱いを受けた。

父は父なりに私を可愛がってくれたが、元々の価値観の違いを埋める術もなかった。

私は、靴職人の彼との仲を父に裂かれてしまった。

最愛の彼とは、もう二度とあう事は出来ない。

私にとって、彼のいない世界など考えられなかった。

彼と結ばれる事の叶わない人生なんて、私には絶えられない。

思い詰めた私は、自らの命を絶った。

そして、視界がフラッシュバックする。

—— 繭。もう一つの前世の記憶です。

「はい」

—— あなたの前世の記憶に、あなたの真実の姿は見つかりましたか？

「わかりません。でも、前世からの因縁のような物は感じます。前世の私は靴職人の彼との仲を裂かれて、思い詰めた拳句に自ら死を選んでしまいました。ほんの少し前の私も、彼に振られて思い詰めていました。そのままでいたら、前世と同じ選択をしたかも知れません」

—— あなたは前世とよく似た状態に置かれたのに、前世のあなたと今のあなたは別の選択をしました。両者を分け隔てたものは何ですか？

「私を救ってくれたのは、両親や兄や友達、そして守護霊さんだと思います。でも、最初に気付くきっかけを与えてくれたのは朋絵……友達です。前世の私には、思い詰めて判断を誤ってしまっても、『間違っているよ』って気付かせくれる人がいなかった。可愛がってもらったけど、それは意のままになる籠の鳥を愛玩するのと同じ……靴職人の彼以外には私を人として愛してくれる人はいなかった」

—— 今のあなたは、なぜ前世と似た様な境遇に置かれたのだと思いますか？

「ただの思い付きですけど、前世で一人きりだった私にも、もっと自分の周りを良く見回せば、私にとっての朋絵の様な人がいたかも知れない。その他にも、私を見守ってくれる人もいたかも知れない。少なくとも、守護霊さんの存在に気付かなかった事だけは確かです。きっと、前世の私は、自分の手で目を塞いで、自分の手で耳を塞いで、自分の目の前にある真実に向き合おうとしないで、逃げていた。その事に気付く為ですか？」

—— それだけでですか？

「……いえ。そもそも自分が判断を誤ったのは、最初に『こうしたい！』と思った時に出来

なくて、周りに流されてどうにもならない状況になってから拒否しようとしたから。その時は我慢出来なくて、ネガティブな感情に支配されて正常な判断が出来ないから、誤った選択をしてしまう。それから、自分が原因でない事にも、必要以上に自分を責め過ぎて。良くない事の原因をなんでも自分の中に求めて、かってに自己嫌悪の渦に陥っていた。前世で私を愛してくれた医者の先生や、靴職人の彼は、あんなにみっともなくなくて醜い私を愛してくれた訳ではない。何でも他人のせいにしてしまう人は酷いけど、何でも自分のせいにしてしまう人も同じくらい酷い」

——では、その思いをあなたのこれからの人生に活かしてください。

*

守護霊さんは私の前世を見せてくれた。
テレビの『守護霊さんの伝言』で度々登場する様に、互いに深い関わりを持った霊同士は何度も一緒に時代に、自分の人生に大きな影響を及ぼす人物として生まれ変わるのだという事を、繭は知った。
前世の先生と靴職人の彼は、同じ魂の生まれ変わりだった。
前世の兄であり父であった魂は、今も兄として生まれ変わっているのだと感じた。
確認のしようなんて無い。
ただの直感だった。
でも、自分の心の中に確信があったから、きっとそうなのだと思う。
そして、前世の先生は愛していた私を痛めつけたから、生まれ変わった前世で再び出会っても、再び愛する様になった私との仲を引き裂かれてしまった。
前世で私を守りきれなかった兄は、私の父として生まれ変わった前世で私を完璧に守ろうとし過ぎて、返ってそれは私にとっての負担となった。
だから、今はむしろ一歩引いた位置で見守ってくれているのだろうか。
そして私は、いつでも自分を責めていた。
それからしばらくの間、繭は守護霊さんに自分の前世を幾つか見せてもらった。
その時によって、様々な時代や場所に生まれて、その時によって色々な立場だったけど、私はいつも、あの先生であり靴職人である魂の生まれ変わりの人と愛し合い、そしていつも何らかの形で二人の間は引き裂かれた。
それは客観的に見れば不可抗力で仕方がない事なのに、いつも私は自分を責め続けていた。
血の涙で溺れてしまうくらいに、執拗に自分を責め苛んで、細かく切り刻んで……。まるで、自分自身がこの世で最も憎らしい仇でもあるかの様に。
際限なく同じ事を繰り返して、それでも飽き足らない私。

いつまで経っても成長しない私。

もう、こんな私は嫌だ。

「もう止めて！」

そう叫んでみても、既に過ぎ去ってしまった前世の記憶が反応する筈が無い。

しかし、余りにも自分を痛めつける自分がいて、その為にますます自分が歪んでいく。

今ここにいる自分は、前世のそんな自分達に対して居たたまれない思いが募る。

そんなに自分を苛めないで！

それでは私が余りにも可哀想……。

なぜ自分をもっと信じてあげないの？

なぜ、自分をもっと愛してあげないの？

これまで、前世の自分が愛したと感じていた思いは、ただの紛い物の儚い幻だった。

自分が一番信じてあげなくてはいけないのは自分自身なのに、自分を信じられなくて、どうして他人を信じられると言うの？

自分が一番愛してあげなくてはいけないのは自分自身なのに、自分を愛せなくて、どうして他人を愛せると言うの？

自分を一番理解してあげなくてはいけないのは自分自身なのに、自分自身を知らなくて、どうして他人に分かってもらえると言うの？

どうして他人を理解できると言うの？

私は、そういったものから今まで目を背けてきた。

耳を塞いできた。

でも、これ以上逃げたくない。

このまま延々と同じ苦しみを繰り返したくないから。

これ以上自分を苛めたくないから。

繭の頬を涙の筋が伝っていた。

小さな胸の中に収まりきれない色々な思いが噴きだして、涙に形を変えて溢れていた。

繭がこれまで胸の奥に溜め込んで来たもの、硬く小さく押し潰して、使い古しのガラクタの様に粗雑に放置して来た、繭の様々な思い。

私自身が汲み取って上げられなかった、私の思い。

ほんの少しずつでもいいから、今まで無視されてきた私の思いを、もう一度手にして、丁寧に向かい合っていきたい。

一度はくしゃくしゃに丸めてしまった物でも、もう一度ありのままの綺麗な姿に戻してあげたい。

きっと、それらの思いを始めて感じた時には、どの思いもきっと明るく輝いていた筈。

今は、頑なにそう信じたかった。

もしかしたら手遅れかも知れない。

もう間に合わないかもしれない。

でも、もし手遅れでも、間に合わなくても、私はこれまで無視してきた様々な思いにもう一度目を向けて、自分自身に向かい合わなくてはならない。

そうしなくては、これ以上一步も前には進めない。

今まで放置してきたものを無視して、無かったものと思い込んで、自分を誤魔化して先に進もうとしても、それでは今までと何も変わらない。

結局自分に嘘をついて、自分を騙して、自分自身を一層深く傷つけるだけ。

だから、例えどんなに時間が掛かろうとも、みんなに置き去りにされても、ゆっくりと時間をかけて、自分自身に向き合わなくてはならない。

そして、いつか本当の自分が見つかったら、本当の自分に戻れたら、あの時朋絵が私にしてくれた様に、私も傷ついた人を優しく労わってあげたい。

そして、あなたの周りには優しく見守ってくれている人がたくさんいますよって、教えてあげたい。

いつでも守護霊さんが守ってくれていますよって……。

自然にそういう事が出来る気持ちになれば、もっと自分が好きになれる。

今までのダメダメな繭ではなくて、きらきら光り輝く本当の繭に生まれ変わる。

素敵な繭に。

そうしたらもう一度、先生や靴職人の彼の魂の生まれ変わりの人と巡り会いたい。

今度こそ、偽りの幻ではなくて、私の本当の気持ちを精一杯傾けて、一生をかけて彼を愛していきたい。

*

それからしばらくの時が流れて、繭は一旦休学していた大学を正式に退学する事に決めた。

復学してまた数年間大学に時間を費やすよりも、繭自身にとってもっと大切な事が見つかったからだ。

なんとなく曖昧な希望が芽生えた時、最初は守護霊さんに相談し、自分の気持ちを確認してから両親に今の気持ちを打ち明けた。

両親は少々驚いた様だったが、反対はしなかった。

父は『繭はもう大人なのだから、自分の事は自分で決めなさい。ただし、自分の決めた事には責任を持って取り組みなさい』としか言わなかった。

大学を休み始めた頃には、いや、もっと前から、いつも小言ばかり言っていた父と母、あれは、私自身の思い過ごしだったのだろうか。

以前の繭が繭の半分しか見ていなかった様に、以前の繭は他の人も半分しか見ていなか

ったのだろう。

今は、自分に対しても、周りの人に対しても、以前よりは二つの瞳で正面から見つめる事が出来る様になった。

きっとそのせいで、他の人の事も以前とは違って見えるのだろう。

繭は大学を退学する手続きをとり、その後、高校時代から仲の良かった静香を始め、何人かの友人と共に、繭の退学を惜しむと共に、新たな門出を祝うささやかな宴を催した。

とはいっても、ノンアルコールで、ケーキが美味しいとちょっと有名だった喫茶店で、しばらくの間 歓談したと言う程度の、とても質素なものだった。

静香を始め、みな口々に『繭、変わったね』といていた。

繭自身は余り変わったという意識はないし、まだまだ色々足りないところだらけだと思う。

でも、今までみたいに自分の事が嫌いではなかったし、ほんの些細な事でも今まで気付かなかった自分の新たな側面を再発見して、少しずつではあっても自分自身を好きになっていっている部分は、敢えて言えば今までとの違いだろうか。

それから何日かして、朋絵とも会った。

相変わらず勉学にバイトにと、忙しそうにしていた朋絵だったが、繭の今の気持ちと決意を伝えると、わざわざ一日時間をとってくれた。

今となっては、朋絵は繭にとってかけがえの無い恩人であり、お手本にしたい人だし、この先もずっと付き合っていくであろう無二の親友だった。

「あのモグウみたいに閉じこもってた繭と外で会えるなんて、もう具合はかなりいいみたいだね」

「うん。朋絵にはとっても助けてもらって、本当に感謝してる。ありがとう」

「ところでさ、前にメールくれたの、覚えてる？ あれから、繭の良い所は見つかった？」

「うん。朋絵が言うみたいにたくさんは見つからないけど、でも、少しずつ自分の好きな所が見つかってるんだ。それまでは、朋絵の言う事なんて全部口から出任せのお世辞だっと思ってたけど、最近『朋絵ってば凄いいっ！』って感心したり。本当に感謝してるんだから」

「全然凄くなんか無いよ。繭は私の友達だし、繭の事が好きだし、その繭が悲しんだり苦しんだりしてるって聞いて、自分が出来る事をただけなんだから。『繭、それは違うよ』ってきっかけは作ったかも知れないけど、そこから先は全部繭自身が立ち向かったんだから、やっぱり繭の力だよ」

「そんな事無いよ」

「そんな事あるよ。それが繭自身が持つ本来の強さなんだから、もっと自慢していいものだ。……といっても、あんまり自慢して見せびらかすのも良くないけどね」

「そんなの言い過ぎだよ。でも、嬉しい」

「うん。それでいいの。そうやって、まだ少し自分の事が好きになったでしょう？ 繭」

「そうだね。私、あれから守護霊さんとお話したり、何回か前世を見せてもらって、気付いた事があるんだ。今まで、私は何も知らなかった。何故かって言うと、自分で見ようとも聞こうとしなかったから。自分では何も決めないで、ただ周りに流されて、それで自分の気に入らない事があると『私はなんてダメなんだろう』って自分を責めて、ますます落ち込んでた。自分が大嫌いになってた。でも、自分で自分自身や周りの人を、ちゃんと両目を開いてまっすぐ見る事で、今まで思っていたのとはぜんぜん違う風に見えてくる。最初に『こうしたい！』って思った事をその時にしていれば、後悔する事も落ち込む事も無い……後悔はするかも知れないけど、やりたい事をやった後の後悔の方が、何もしない後悔よりずっとマシ。結局、私は勇気が無かったんだなって思う」

「色々考えたんだね」

「それで、前に夢で（朋絵が多分守護霊さんだって言った声に）『本当の繭になるにはどうしたらいい？』って聞かれた時には分からなかったけど、今は分かる様な気がするんだ。自分のやりたい事を我慢せずにやって、自分を好きになって、あと自分自身をよく理解する事。たったそれだけだと思うんだ。大体、自分を好きでもないのに、人を好きになれる訳が無いし、自分の事もわからないで人を理解できる訳無いでしょ。公太に振られたのも、あの時の私なら当然だったんだよ」

「そっか。もうちゃんと自分で心の整理がついてるんだね。なんか少し会わない間に随分強くなったんだね。繭、本当に変わったよ」

「えへっ。この前静香達にあった時もそう言われちゃった。自分では全然自覚無いのに」

「だからさ、今の繭は本当にありのままの繭だから、きっと自分自身ではよく分からないんだよ。でも、周りから見たら、今の繭は見違えるほどにとっても素敵だよ。きらきら輝いてる」

「そんなあ。幾らおだてたって何も出ませんよ」

確かに、ちょっと照れてはにかんだ繭の表情は、世の男達の視線をひきつけて離さない程の魅力に満ち溢れていた。

最早そこには、涙に頬を濡らして、顔中泣き腫らしたかつての繭の面影は微塵も感じられない。

「ところで、大学辞めてからどうするかはもう決まってるの？」

「うん。ちょっとおしゃれな雑貨屋さんみたいなお店で働きたいなって思って、今探してるんだ」

「そっかあ。昔から小物とか雑貨とか好きだったからね。そうしたら、今ちょうど就活中だ」

「そんな、就職なんて大げさでなくても、アルバイトでいいの。それで、いつか自分のお店持てたら良いなって思ってるんだ」

「そんな事まで考えてるんだ。私なんて大学とバイトの往復だけで忙しくて、そんな先

「^{こと}の事なんて^わ分からないなあ。なんか、^{まゆ}繭に^{さきこ}先越されちゃった」

「^{こと}そんな事無いよ。今^{わたし}私が^{おも}こう思えるのも、みんな^{ともえ}朋絵のおかげなんだから。それにね、お^{みせ}店で^{はたら}働きたい理由は、もう一つあるんだ」

「何？」

「^{ひみつ}秘密。教えてあげない」

「^{わたし}こらあ。私^{ひみつ}の秘密だって繭に^{まゆ}だけ特別に^{とくべつ}教えてあげたのに、その^{おんじん}恩人に^{かく}隠す秘密なんてないでしょ？」

「^{こと}そんな事いったって、^{ひみつ}秘密は^{ひみつ}秘密なんだから、^{おし}教えてあげない」

「まゆう？」

「^{いく}幾ら^{ともえ}朋絵の前でも、これだけは^{まえ}自分でもちょっと^{じぶん}照れくさくて、^て恥ずかしくて、^は今^{いま}この^ば場で^{あき}明らかに^{でき}は出来なかった。」

「^{ぜん}前世で^せ何度も^{なんど}巡り会って、^{めく}その^あ度に^{たび}愛し^{あい}合^あった^{ひと}人の^{たましい}魂^みが^うまた^か生まれ^{わたし}変わって、^{こと}私^{きかい}の^{おお}事^{みせ}を見^{はたら}つけてくれる^は様に、そして、^はその^{ひと}人を^{じぶん}自分^{じしん}自身^みが^{よう}見^{ひと}つけられる^{せつ}様に、^{きかい}人と^{おお}接する^{みせ}機会^{はたら}の多い^はお^{きかい}店で^{おお}働^{みせ}きたいなんて、^は恥ずかしくてとても^き言えない。

「いつ^{とき}その^く時^わが来るかは^わ分からない。

でも、^{ぜったい}絶対^{ひと}その^{わたし}人は^{もと}私^きの^{もと}元^きに来てくれる。

そして、^{こんど}今度こそは、^ききっと……。

＊

今日は、^{あにき}兄貴^{ひさ}が^{じっか}久しぶりに^{かえ}実家^{かえ}に帰ってきた。

「^よなぜだか^わ良く^{まゆ}分からないが、繭^{しめい}ご^{きよう}指名^{ぜったい}で『今日は絶対に早く帰ってこいよ』と^{ねん}念^おを押されてしまった。」

「^{さいきん}メールで^{ざっか}最近^{みせ}雑貨^{はたら}のお店^{ぐち}の^{さが}働^かき口^{よるおそ}を探^{そと}している^でと書いて^{おも}いたので、^{おも}夜遅く^{おも}まで^{おも}外^{おも}に出^{おも}ているとでも^{おも}思^{おも}ったの^{おも}だろう。」

「^{なんねん}何年^わぶりとなるか^{ひさびさ}分からない、^か久々^{そくよにん}に^{ゆうしょく}家族^{せき}四人^{かこ}で^{あと}夕^{あにき}食^{まゆ}の^き席^きを^き囲^きんだ^き後^きで、^き兄貴^きが^き繭^きに^き切^きり^き出^きした。」

「^{まゆ}繭、^{しゅうしょく}ところで、^{しゅうしょく}就^{しゅうしょく}職^{しゅうしょく}の方は^{しゅうしょく}どうな^{しゅうしょく}って^{しゅうしょく}んだ？」

「^{なんげん}うん。何軒^いか行^みって^い見た^いんだけど、^いなかなか^いね……」

「^{まゆ}繭は^{あいよう}愛用^{いちごう}の『にゃんこ一号』で^{しゅうしょく}就^{しゅうしょく}職^{しゅうしょく}情^{しゅうしょく}報^{しゅうしょく}サ^{しゅうしょく}イト^{しゅうしょく}を^{しゅうしょく}調^{しゅうしょく}べ^{しゅうしょく}たり^{しゅうしょく}して^{しゅうしょく}いた^{しゅうしょく}が、^{しゅうしょく}なかなか^{しゅうしょく}う^{しゅうしょく}ま^{しゅうしょく}く^{しゅうしょく}い^{しゅうしょく}って^{しゅうしょく}いな^{しゅうしょく}いら^{しゅうしょく}しい。」

「^{しゅうしょく}そうしたらさ、^{しゅうしょく}ここへ^{しゅうしょく}い^{しゅうしょく}って^{しゅうしょく}みた^{しゅうしょく}ら^{しゅうしょく}どう^{しゅうしょく}だ？」

「^{あにき}兄貴^{つうきん}が^{つか}通^{かばん}勤^だに使^{ゆにゅうざっか}っている^{みせ}鞆^{みせ}から^{みせ}出^{みせ}した^{みせ}のは、^{みせ}輸^{みせ}入^{みせ}雑^{みせ}貨^{みせ}の^{みせ}店^{みせ}の^{みせ}パン^{みせ}フレ^{みせ}ット^{みせ}だ^{みせ}った。」

「^{かいしゃ}そこ、^{とりひきさき}うちの^{きのう}会社^{てんちよう}の^{ひと}取引^い先^いでさ、^い昨日^いた^いまた^いま^いそ^いこの^い店^い長^いと『^い人^いを^い入^いれ^いたい^いん^いだ^いけ^いど、^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな^いった^いん^いで、^い繭^いから^い入^いって^いた^いメ^いール^いを^い思^いい^い出^いして、^い『^い家^いの^い不^い出^い来^いな^いい^い人^いい^いない^いか』^いって^い話^いに^いな

妹 ですが……』って話したら、本人にその気があったら面接に来てくれって言うからさ、とりあえず 話 だけしに来たって訳」

「不出来は余計。でも、本当に？」

「疑 うんなら、直接電話してみろよ。もう先方に名前言ってあるから、電話で『面接希望の鴛田繭です』って言えば分かると思う。後は先方と直接決めればいい」

その様な経緯で、繭は兄貴に紹介された輸入雑貨の店 『カモミール』を訪れた。午後三時頃に 何 うという事で店を訪れたが、店内には誰もいない。

「あの、どなたかいらっしゃいませんか？」

繭の声に店の奥から『少 々 お待ちください』と声がし、間をおかずに店員さんが出てくる。

「面接でお伺いした鴛田繭です」

深くお辞儀をした繭が、頭 をあげた途端に『あ！』と思わず叫んでしまった。

繭の目の前にいたのは、以前ディスカウントストア『タイム・イズ・マナー』でアルバイトをしていた時に、あのにつくき痴漢ストーカー野郎と間違えて繭が平手打ちをしてしまった、あの流 暢 な日本語を話す外国人のお客 様 だった。

「あの時は、本当に申し訳ありませんでした」

繭は内心『ヤバス（汗）』と再び頭 を深く下げて謝 ったが、彼は穏やかに笑っていた。

「実はあの次の日、それなりの事情があるのに、あんな若いお嬢 さんに言い過ぎたかなと思っ、もう一度お店にいったんです。そうしたら、あなたはもう辞めたと言われました。ですから、可哀想な事をしたと気になっていました」

「いえ、私 が悪かったんですから、本当に申し訳ありません」

「そうですか、あなたが鴛田さんの 妹 さんですか」

繭はもう絶対面接は不合格だと確信した。

それどころか、兄貴の会社の取引先なのだから、場合によっては兄貴にまで迷惑をかけるかも知れない。

どうやって謝 ろう……。

「鴛田さん。今休憩にいている店員が帰ってきたら、店の奥の事務所で面接しましょう先に事務所の椅子に座っていて下さい」

話し振りからすると、彼が店 長 の様だ。

しかし、店 長 にしては随分若く見える。

繭より精々五～六歳上、二十台半ばというところか。

以前バイト先で失態を犯してしまった時には、心 の余裕がなくて全然分からなかったけれども、こうやって改めて彼を見ると、何となくキアヌ・リーヴスに似た面影を持つ、かなり人目を惹く人だと言う事に気付いた。

繭は 促 されるままに、店の奥にある小さな事務所の椅子に慎ましく腰掛けていますと、

五分もしないうちに店長さんが事務所に戻ってくる。

「では面接を始めましょう」

繭は用意してきた履歴書を店長に渡す。

店長は代わりに自分の名刺を繭に渡してくれた。

——アレキサンダー・ブラッドレイさん？

「鵜田さん。面接を受けた理由を教えてくださいませんか？」

「小物とか、雑貨品が好きだったからです。それに、兄貴……兄からこちらを紹介された時のパンフレットが、ちょっとおしゃれで素敵だなと思いました」

「それは、ありがとうございます。ところで、大学を退学されてますね。理由を教えてくださいませんか？」

「それは……」

繭は一瞬悩んだ。

精神的ショックが重なって、大学を休んで引きこもっていたなんていったら、面接に落ちるばかりでなく、社会不適応者のレッテルを貼られてしまうかも知れない。

以前の繭ならば、適当に誤魔化してお茶を濁していただろう。

しかし、今は、例えば面接に落ちても、嘘は言いたくない。

もう、自分を騙すのも、他人を騙すのも嫌。

それに、店長さんがあの外国人のお客さんだったというだけで、もう八割がた不合格みたいなものだ。

今更嘘で取り繕おうが、結果は見えている。

「実は、店長さんを叩いてしまって、お店を辞めた後にも、他の精神的ショックも重なって、大学にも通えなくなっていました。その間に色々考えて、今の私には大学よりも、大好きな雑貨のお店に勤めて、いずれ自分のお店がもてれば良いなって思いました」

「大学よりも、雑貨のお店を選んだという事？」

「そうです。やっぱり、好きな事、やりたい事をやるべきだと思いました」

しばしの沈黙が流れた。

「OK。あなたのやる気を買いましょう。繭で良いですか？」

「はい？」

「このお店はフレンドリーにしたいので、ファーストネームで呼びあっています。繭、あなたは合格です。明日から頑張ってください」

店長さんの言葉に、繭は一瞬呆気にとられた。

自分はもう不合格だろうと、半ば諦めていたからだ。

しかも、自分が引きこもっていた事も白状した上で、店長さんは採用を決めてくれた。

この人は履歴書の文字ではなく、私自身を見てくれる。

嘘を言わなくてよかった。

ほっとする繭^{まゆ}の視線^{しせん}の先^{さき}では、店長^{てんちょう}さんが優しく^{やさ}微笑^{ほほえ}んでいる。

「ありがとうございます」

繭^{まゆ}は喜^{よろこ}びに満^みちあふれた最高^{さいこう}の笑顔^{えがお}を零^{こぼ}し、感謝^{かんしゃ}の意^いを込^こめて改^{あらた}めて深^{ふか}く一礼^{いちれい}する。

その脳裏^{のうり}に、守護^{しゅご}霊^{れい}さんの残^{のこ}したこんな一言^{ひとこと}が思い起^{おも}こされていた。

——繭^{まゆ}、あなたが前世^{ぜんせ}で愛^{あい}した人^{ひと}と、既^{すで}に出会^{であ}っているのですよ。もう一度^{いちど}出会うチャン^あスはありますから、その時^{とき}を見逃^{みのが}がさない様^{よう}にして下^{くだ}さい。今のあなたなら、きっと『この人^{ひと}だ』と分^わかるでしょう。繭^{まゆ}のお兄^{にい}さんが、二人^{ふたり}を引き合^ひわせてくれます。

(了)

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。